資料８

市民参加円卓会議の結果について

１　日時

平成２１年３月１日（日）

午後１時３０分から午後５時まで（予定は午後４時３０分まで）

２　場所

職員会館「かもがわ」　大会議室

３　コーディネーター

立命館大学産業社会学部教授　乾　亨　氏（京都市市民参加推進フォーラム座長）

４　参加者

３７名（欠席者４名）

（内訳）

市職員　２７名

京都市市民参加推進フォーラム委員　９名（乾座長を除く。）

立命館大学大学院生　１名

５　議論の内容や意見等

（１）グループワーク

テーマＡ：きょうとの市民参加のきょうとあした

テーマＢ：何をめざして「参加をしかける」んや？

（２）議論で出された主な意見

ア　若手職員を中心に…「参加をやらされてる」感がある。なぜ，何のために市民参加に取り組むのか，が伝わらないまま参加の形式だけ整えればそれでいいという雰囲気（上司も文句を言わない）…というたぐいの意見がいくつか出された。

イ　「なぜ参加なのか」「どうしたらいいのか」などを，これまでの経験を通して伝えてくれる「語り部」がほしいという意見や，（かつて行なわれていた「市民参加推進プロジェクト」のように）参加の体験を通して学べるような場が必要（とりわけ，新人のときにそのようなことを実感する場が必要）との意見が出された。

ウ　業務の評価が「数字」だけで行われることが問題。質的な側面についても評価することが必要，などの意見が出された。

エ　一方で，この 10 年間，参加のあり方は進んでいて，いろいろな領域で面白い（職員の仕事としても）取組はある，という意見もあった。

オ　参加は人・金・手間がかかってしんどい。本当に参加は必要なのかという問いかけがある一方で，参加はトータルに見て（混乱が起きないとか市民理解が進むとかを含めてみれば）「合理的」なのだということをわかってもらう必要がある，という意見もあった。

カ　以前フォーラムの自主勉強会で，某ベテラン職員が，市職員が燃えていた時代を神話時代と例えて，「神話の時代は二度とは戻らない」と語ったのに対し，１０年前に市職員が初めて住民とともに創る喜びを覚えた時期を「初恋」に例え，「初恋は二度と巡ってこないけど，それぞれの年代に応じた恋がある。２０歳の恋も，大人の恋も，老いらくの恋も，素晴らしいはず」との意見が語られた。

　この見方に触発され，いろいろな職員から，「恋の手ほどきをしてくれるアドバイザーが欲しい」という要望が出されたり，「自分が恋人を引き合わす仲人役になる」と決意表明をする職員が出るなど，大いに盛り上がった。

キ　今，多くの職員が面白いと感じている（やりがいを感じる）参加の領域は，「地域まちづくり」における住民の皆さん達との連携のように感じる。10 年前に京都市で始まった参加は，審議会の公開や審議会への市民公募委員の参加，パブリックコメント，などによる「市政への参加」と，ワークショップによって公園や河川改修計画を行ったり，基本計画を策定したりする「計画プロセスへの参加」が中心であったが，今は，地域住民（あるいは市民活動）と協働でまちづくりに取り組み，課題解決を目指す「協働（パートナーシップ）」が市職員の（市行政の）重要な任務になりつつある，ということなのではないか。（乾先生談）

６　今後の予定

（１）市民参加円卓会議で出た議論の結果を生かして，「市民参加ガイドライン」の改訂に生かしていく。

（２）今回の参加した職員に対して，市民参加推進フォーラムの議論の情報をはじめ，市民参加の取組の情報を庁内メールで流して，今後の取組への巻き込みを図り，庁内に市民参加の輪を広げて，庁内に市民参加の機運を醸成する。

（３）市民参加フロンティアの職員を中心にして，再び市民参加の機運を盛り上げに取組んでいく。